

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：84413

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22401022

研究課題名(和文)宋代官窯青磁の系譜

研究課題名(英文)Overview of Kuan Celadon of the Song Dynasty

研究代表者

伊藤 郁太郎 (ITO, IKUTARO)

公益財団法人大阪市博物館協会(大阪文化財研究所、大阪歴史博物館、大阪市立美術館、・大阪市立東洋陶磁美術館・名誉館長)

研究者番号：40373518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,700,000円、(間接経費) 1,410,000円

研究成果の概要(和文)：宋代官窯青磁は、中国陶磁史上、最高の芸術的評価を受けている。その源流をなすのは汝窯であり、やがて南宋官窯などにその造形志向が引き継がれ、本流となった。しかし2000年、汝州張公巷窯の青磁が発見され、それ以来、南宋時代の文献のみで知られた「北宋官窯」ではないかとの説が、宋代官窯青磁研究に一石を投じた。本研究は、宋代官窯青磁の主要窯について、考古学的な新知見を軸としつつ、美学美術史的観点を加え、研究の最前線の動向と課題を明らかにしたものである。同時に汝州張公巷窯の活動年代についての仮説を提出した。

研究成果の概要(英文)：Celadon ware produced at the official kilns of the Song dynasty enjoys the highest aesthetic recognition in the history of Chinese ceramics. Official celadon ware has its rise in Ru ware, the aesthetic ideal of which had been carried on by Southern Song Guan ware and became the main stream. Since the discovery of Zhanggongxiang celadon in Ruzhou in 2000, however, opinions relating Zhanggongxiang kiln to the "Northern Song Guan kiln", which has been referred only in the literature of the Southern Song dynasty, gave rise to new discussions in the studies of Song official celadon. This study elucidates the forefront of the current trends and issues observed in research on main Song official kilns. While it is based on new archaeological views, observations from aesthetic and an art historical perspective are added. The study also proposes a hypothesis on the active dates of Zhanggongxiang kiln.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学、美学・美術史

キーワード：汝窯 汝州張公巷窯 南宋官窯 修内司官窯 郊壇下官窯 老虎洞窯 南宋越窯

1. 研究開始当初の背景

(1) 中国陶磁の最高峰とされる伝世汝窯青磁の生産地が河南省豊宝県清涼寺で確認されたのは 2000 年のこと、その後から宋代官窯青磁の主要な窯址が次々と発掘調査され、新知見が充実して来たが、日本ではそれらを積極的に追求する動きが鈍かったため、前プロジェクトに引き続き研究を続行することとした。

(2) 2000 年に発見された汝州張公巷窯は、発見当初から文献のみで知られる北宋官窯に比定する中国研究者が多かった。北宋官窯は徽宗代に設立されたと伝えられる名窯だが、汝州張公巷窯は北宋末の活動を証明する資料が十分ではなかったため、発掘調査の続行が決定され、さらに国家予算もついたため、研究の中心課題に据えた。

2. 研究の目的

(1) 中国の宋代官窯青磁は、中国陶磁史の中で芸術的評価の頂点に立つとの認識から、地域的、時期的な広がりを持つ汝窯、汝州張公巷窯、修内司官窯、郊壇下官窯等の全体像を把握の上、各窯の特徴を探り、継承関係を糺し、官窯青磁の成立を可能に導いた諸条件を明らかにしようとした。

(2) 北宋官窯に擬せられる事のある汝州張公巷窯の活動年代の推定を計り、汝州張公巷窯 = 北宋官窯説成立の可能性を検討した。

3. 研究の方法

中国陶磁の近年の研究は、窯址調査中心の地域的性格を持つ傾向が強く、宋代官窯青磁研究のような全体像把握の構想を持つものは少ない。また、美学美術史的観点に立つ研究も稀である。そのため本研究では、あくまで考古学的な成果に立脚しつつ、様式的変遷、時代の造形意思、内容と形式など美学美術史的観点からの考察に留意した。

具体的考察の対象としたのは、下記項目である。

(1) 宋代官窯青磁の源流をなす汝窯の考察

(2) 汝窯の製陶技術を継承する汝州張公巷窯の考察

(3) 南宋官窯の一つ、修内司官窯に比定される杭州老虎洞窯の考察

(4) 宋代官窯青磁の開片に対する美学的考察

4. 研究成果

(1) 汝窯

概要

明清時代、既に宋代五大名窯の筆頭に挙げられていた汝窯は、近代に至ってもその実態は明らかではなく、1936-37 年、パーシバル・デビッド卿がその「汝窯所見」において初めて汝窯青磁の特定と整理を行い、現在の認識とほぼ一致するに至った。しかし、窯址が発見され、最初の発掘調査が行われたのは 1987 年になってからであり、河南省文物考古研究所による 2002 年まで 8 回におよぶ発掘調査のなかで、伝世汝窯の生産地が確認されたのは、漸く 2000 年の事である。これらの調査

によって、汝窯に関する新知見は予想以上のものとなり、伝世汝窯によって培われた汝窯観は一変する事となった。新知見の主なものは、次の通りである。

汝窯の性格

汝窯窯址に初期段階と成熟段階があり、前者からは臨汝窯タイプの民窯製品が出土した。汝窯の性格は、あくまで民窯を基礎としながら、朝廷の命により朝廷用の青磁を焼造した窯であり、朝廷が設置し自ら運営した官窯ではなく、貢窯であったとする見解が定着しつつある。その活動年代は、初期段階が、「元豊通宝」の出土により、下限、神宗元豊年間(1078-1085)、成熟段階は、「元符通宝」と「政和通宝」の出土により、哲宗(1085-1100)、徽宗(1100-1125)年間と考えられ、是についてもほぼ定説化されている。なお、徽宗宣政年間に「北宋官窯」が設立されたことが、南宋の文献、葉真『坦齋筆衡』などに記載されているが、その実態や設置の理由については諸説がある。

汝窯の技術

南宋代から既に高い評価を受けていた汝窯青磁は、技術面でも多くの革新的な工夫を加えていた事が判明した。周輝『清波雜誌』などの古文献に「内に瑪瑙末有り、釉と為す」とあるが、汝窯窯址から瑪瑙が発見され、それを裏付けた。また、窯は、初期段階では主に馬蹄形、成熟段階では楕円形の何れも温度調節が容易な小型の窯で、燃料は石炭ではなく薪が使用された。匣鉢で特徴的なのは、成熟期においてはその外側の側壁に耐火土を塗り、密閉性と温度効率を高める工夫がなされている。これは汝州張公巷窯など、汝州周辺の窯でも見られ、汝窯独自の窯業文化圏を形成していた事が分かる。窯道具や焼成方法についても墊圈支焼と満袖支焼という技術の発達により、汝窯青磁の特徴である「芝麻支釘(ごま粒状のハリ目)」の実現を見た。此の技術は南宋官窯に受け継がれ、満袖支釘は宋代官窯青磁の大きな鑑別標識となった。また、汝窯では素焼が行われたことも確認された。中国青磁の大動脈である越窯では素焼の習慣はなく、素焼焼成がその後、南宋官窯に受け継がれて行った。しかし一方、南宋官窯では、本窯の形態はすべて越窯の伝統を踏んだ龍窯であり、南宋官窯において、北方と南方の窯業が融合したと言えよう。

汝窯の造形

汝窯の器種、器形は、従来全く知られて居なかった香炉、梅瓶、鸞頸瓶、方壺、円壺、套盒等が出土し、祭祀における北宋代の復古主義の反映を窺う事が出来る。また成形については、汝窯の成熟期には基本的に陶範によって行われ、同一製品の大量生産を可能にし、厳格な寸法管理を徹底させた。これは宮廷用製品特有の「様」という仕様に基づくもので、南宋官窯の陶範の特徴を述べた「澄泥為範、極其精緻」という記文の原点をここに見る事が出来る。新発見による多くの新知見の内、

最も注目されたのは、印花、劃花、刻花、透彫等による様々な装飾を施した製品が初期、成熟期を通して見られたことである。伝世品には殆どこうした装飾は見られず、其の理由については未だ解明されていない。

汝窯研究の動向と課題

2002年までに8回に渉る発掘調査を終え、大きな成果を収めながら、河南省文物考古研究所（現在、河南省文物考古研究院と改称）は、現在も清涼寺村内の成熟期汝窯の発掘を継続しており、新資料も出土しつつある。それは元代と推定される祭器資料であり、新しい展開が期待できる。未解決の課題としては制作年代の更なる分期、汝窯の天青色釉色の由来、汝窯系窯業体系の広がり、北宋官窯との関連、宋代官窯制度の精査などである。

(2) 汝州張公巷窯

概略

北宋官窯について記述した著録のうち、信頼に価する原書は、南宋代の書、『坦齋筆衡』、及び『負喧雜錄』である。しかしその南宋代の記文といえども、記載内容は「政和間（或いは宣政間）京師自置窯燒造、名曰官窯」という僅か14字に止まる。このことは、既に南宋代においても、北宋官窯が沓として実情掌握が困難であったことを示唆している。北宋官窯の存続期間がごく短く、生産された産品もごく少なく、宮廷外で見ることごく稀であり、更に靖康の変（1126～27）によって後世に継承された作品も極めて限定されていた等の事情によるものであろう。しかし、その文献的価値は極めて貴重であり、北宋官窯の設置は、それまで数十年間にわたって「宮中の禁燒」として天青色の青磁を作り続けて来た汝窯に対して挑戦した徽宗の一つの試みであったとも考えられる。北宋官窯の解明は、中国陶磁史の研究者にとって最大の関心と興味を呼ぶ重要な課題の一つであることは間違いない。2000年以來、河南省文物考古研究所によって発掘調査が進められてきた河南省汝州張公巷窯が、北宋官窯に比定し得るといふ論議がある。しかし、発掘調査の及ぶ範囲は未だに狹隘で、窯体すら発見されず、十分な資料が整っているとは言い難い中で課題の最大のものは、張公巷窯が果して北宋末に活動していたかどうかの一点に集約される。

年代推定の根拠

張公巷窯は汝窯の後発の窯業体であり、汝窯の造形と製陶技術を継承していることは、ほぼ通説となっている。さらに張公巷窯が民窯ではなく、官窯、或いはそれに類似する質の高い窯業体であったことも異論がない。問題はその活動年代であり、一部の研究者が北宋末と考えているのに対し、他の研究者は金、或いは元代の仿汝、或いは仿官窯説の立場を取っている。この問題を解決するためには、最終的には張公巷窯の窯体を含むさらに広範囲に互る発掘調査が不可欠である。しかし、現段階における発掘資料と史実の調査だけ

によって推定する場合、様式論的考察、12世紀前半の高麗青磁との比較、さらには徽宗の美意識などの視点があり得る。

様式論的考察

張公巷窯と汝窯の造形と製陶技術の継承関係の比較対照は、二つの範疇に分けて考察する必要がある。即ち、一つは、ある現象がその窯の持つ固有の特質、或いは独自性を示すと考えられるもの、他の一つは造形と製陶技術の伝統における継承関係を示すと考えられるものである。前者の例としては、釉と胎、開片の状態、支釘の形状と枚数などの現象であり、後者の例としては裏足（撥高台）と平直圈足（立高台）の量的比率、器形の変遷などが考えられる。ここで必要なことは、汝窯から張公巷窯への変遷現象が、靖康の変（1126-27）による南渡によって南宋越窯、南宋官窯、さらには龍泉窯にどのように継承されているかを検討するという視点である。その様式論的考察によって、宋代における官窯系青磁の系譜が汝窯から張公巷窯へ、その両者から南宋越窯、南宋官窯、さらには龍泉窯へと年代順に継承されていることが実証出来れば、張公巷窯の年代的位置づけが可能となるであろう。現在、発表されている報告書、簡報、実物資料の観察を加えて、北宋代から南宋代にかけての官窯青磁の造形と製陶技術の変遷のうち、本研究では、一部の器形の様式的変遷に焦点を絞って考察を試みた。

高麗青磁との関連

汝窯が高麗青磁に大きな影響を与えていることについては、既に多くの研究者が指摘しているところである。しかし、張公巷窯の器形や製陶技術が、12世紀前半の高麗青磁に影響を与えているか否かについての検討はほとんどなされていない。既に釉色の類似については指摘されている。ここでは器形と成形方法の共通性に、焦点を当てる。両者の器形の比較に当っては、先ず、張公巷窯のみから発見される器形と成形技法に限定することが必要であろう。汝窯と共通するものは、除外しなければならない。張公巷窯特有の器形と成形技法をもつものは、花口折腹圈足盤、葵口折沿平底盤、楕円形圈足盤、四方平底盤、敞口小壺、四方套盒、鼎形香炉等である。ここでは2例を挙げる。

a. 高麗青磁四方套盒（韓国国立中央博物館所蔵）

套盒は儀器の一種で、汝窯では円形、四方、六方がある。張公巷窯からも四方套盒が出土する。その成形方法は汝窯では側壁と天板、それぞれの陶范が出土したため、組み合わせ成形であることが確認された。また、側壁の四面に菱花形花文が印模されている。一方、張公巷窯では素焼陶片が出土したが、側壁と天板一体型成形で高麗青磁の四方套盒の場合と同じである。四方套盒の成形法に関する限り、高麗は汝窯ではなく、張公巷窯の影響を受けた可能性がある。重要なことは、高麗

の套盒は仁宗長陵出土と伝えられ、1146年以前の重要な編年資料である事である。

b. 高麗青磁鼎形香炉（大阪市立東洋陶磁美術館所蔵）

中国の古銅器・鼎の器形に則った鼎形の香炉で、陶范による成形である。制作年代は12世紀前半を下ることはないと言われる。中国青磁に影響を受けた造形であるとすれば、やはり、汝窯、張公巷窯、耀州窯、越窯の何れかにその源流を求めたいが、汝窯、耀州窯、越窯からは同じ造形の鼎形香炉は出土していない。しかし、張公巷窯では鼎形香炉の高脚の一部と胴部一部の断片が確認されている。完全一致とは言えないにしても、高麗青磁の鼎形香炉の造形の源流を、張公巷窯に求める可能性は大きいと考えられる。

上述の高麗青磁の作例は、仁宗長陵出土と推定されているa例を含め、いずれも12世紀前半の制作と考えられるものである。これらの造形的特徴が汝窯ではなく、張公巷窯製品に類似し、その影響を受けたものであることが確認されれば、12世紀前半に張公巷窯が活動していたことを裏付ける資料になる。靖康の変（1126-27）以降、少なくともほぼ20年間は汝州は金と南宋との間の戦闘の只中であつたことは、多くの史書が伝えている。ようやくこの地に政治的な安定を見たのは皇統2年（1142）の第二次金宋和議の成立以降のことである。こうした政治経済社会の全面にわたる混乱の状況の中で、金の政権があえてこの地に官窯を新しく設置し、或いは北宋官窯の運営を継続しただろうか。更に張公巷窯金代説に一步譲って、12世紀後半以降に設置されたかと仮定しよう。政治的安定、或いは金の章宗の北宋徽宗の芸術への傾倒など、12世紀後半に金代官窯が設置される外的条件は整えられるかも知れない。しかし張公巷窯出土品の主たる部分は、汝窯の造形、製陶技術を深く受け継ぐもので、それらが12世紀後半まで継承されたとは考え難い。たとえば、耀州窯の宋代の出土品と金代の出土品とを比較すれば、その造形的・技術的相違は直ちに理解出来ることであろう。時代様式というものは容易に醸成されるものではなく、その時代の本質的な部分に深く根差したものであることを考慮する必要がある。

徽宗の美意識

文献に徴する限り、宣政年間に北宋官窯は設置された。それは取りも直さず、徽宗帝の治世下のことであり、少なくとも、この事業が徽宗自らの発案、或いはその意向に添ったものと考えられる。何故なら、徽宗は詩文書画の分野において自ら秀でた制作者、鑑識家であり、自らの芸術意志の達成に自ら賭けていた人物であつたからである。更に徽宗の関心は造園、建築、音楽にも及び、古美術品の大収蔵家でもあつた。このような人物が、宮廷用の青磁の制作に当たって自らの芸術意志を反映させようとしなかつたとは考え難い。詩画と同様に自ら直接批評し指導して、

行くべき方向を明確に指示して行ったことであろう。ここでは徽宗の絵画についての米國プリンストン大学方聞博士の説を参考にしながら、北宋官窯青磁の釉色に対する一考察を行いたい。

方聞博士によれば徽宗の芸術においては、一方において伝統を尊重する傾向があり、他方、それを革新する傾向が同時進行的に達成されている。絵画作品に例を取ると、方聞博士は、徽宗は郭熙の「模擬幻真」を放棄して新しい改革を実現するために、一方において宋畫院の「模擬写神」を支持し、他方において「原始への復古主義」を目指していると指摘する。即ち、写実主義と原始主義がここでは同時に並存しているとする。その前提に立つのが、E.H.Gombrichの主張する「原始主義が芸術発展過程においては<動力牽引>の契機になる」という観点であり、方聞博士が徽宗の絵画に、原始主義を認める根拠の一つとなっている。北宋官窯においても青磁の釉色における「復古」、或いは「原始主義」的指向を想定し得る。ここでは、張公巷窯が北宋官窯に同定されるという前提の下で、推論を進める。前述の通り、徽宗は北宋晩期に盛行を見た「宮中の禁焼」である汝窯が到達していた天青色を遙かに凌駕する究極の青磁の創出を意図していたに相違ない。汝窯の天青色は、「模擬写神」の境地に行くものであつた。それを支持しながら革新を狙う復古とは何であつたか。具体的には晩唐五代の越窯秘色や五代耀州窯の「淡灰緑色」がそれに当たるのではないかと、という想定である。張公巷窯出土の陶片を多く実見した結果、青みを帯びた釉色ではなく、緑味を帯びた釉色に美しいものが多い事が確認できた。即ち「淡灰緑色」が張公巷窯青磁が目指した釉色ではないかと考えられる。また、張公巷窯が、仮に金代の官窯であつたとしても、仿北宋官窯の性格を帯びていた筈であり、北宋官窯の釉色が淡灰緑色であつたという想定は変わりない。

ここで、近年の汝州張公巷窯金代説について触れておきたい。近年、張公巷窯に近接する汝州東溝窯址から金代銅銭が出土した事により、東溝窯が金代の窯址である事が確認された。或いは、平頂山市の葉県文集遺址から金代の陶磁が多く出土し、これらの遺址から張公巷窯類似の青磁が発見された事などの理由により、張公巷窯も金代の窯であると推定する説が有力視されている。しかし、東溝窯出土品を詳細に観察すると、器形や成形方法、或いは釉色など、張公巷窯製品と類似する点もあるが、決定的な相違点は、質的な差である。この差を同時代的な民窯と官窯の差であるか、そこに時代的な差もあるか、更なる検討が必要と思われる。また、葉県遺址出土品の中の張公巷窯類似製品は、金代製品の出土坑とは性格の異なる坑から出土していると考えられ、これまた、出土状態をさらに詳細に検証する必要がある。即ち、現在の段階では、金代説を決定させる

証拠としては十分ではないと考える。

結論

汝州張公巷窯の活動年代に関しては、それが北宋官窯に同定出来るか否かの大きな判断材料になるため、今日まで様々な意見が提出されている。しかし2014年3月末現在、予定されていた発掘計画が予算措置も取られていたものの、用地立ち退き問題が解決されず、膠着状態が続いているのが現状である。(本研究計画開始前の汝州市当局と河南省文物考古研究所による確認では、2012年中の再発掘が予定されていた)。従って、張公巷窯については、現在までの出土資料、関連資料を精査して、その活動年代の推定を行った。即ち、活動年代の開始は北宋末であることを決して否定出来ない、というものである。

(3) 南宋官窯

概要

南宋官窯は杭州市内鳳凰山麓の修内司窯と、烏龜山の郊壇下窯の二つの窯址があるとされている。修内司窯は、南宋の顧文薦『負喧雜録』、葉真『坦齋筆衡』などに「故京の遺制を襲いて、窯を修内司に置き、青器を作り、内窯と名付く」と記載され、文献的にも伝世資料的にも宋代官窯を代表する窯である。しかし近代に入ってその実態は明らかではなく、修内司窯は窯自体の存在すら否定される事もあった。現在では、杭州市文物考古所によって発見された杭州鳳凰山下の老虎洞窯が修内司窯に同定されるとの見解が定着しつつある。老虎洞窯は1998年、1990年の二度に渉る大規模な発掘調査により、大量の資料や遺構が発見された。しかし、現在に至るも調査報告書が発行されず、公表された内容は限定的であるが、基本的な様相は窺う事ができる。また郊壇下窯は、1920年代に発掘調査され、1996年に調査報告書が発行されたが、調査の範囲が一部に止まり、出土遺物も十分ではない。

これら資料による新知見や課題の主なもの、次の通りである。

老虎洞窯の活動年代

老虎洞窯が修内司官窯に同定し得る事は、「修内司窯」銘の制作用具が窯址から出土したことによって裏付けられたとされる。地層の年代については、南宋代と元代の二つの層位が断絶しており、元代層から鉄絵の「官窯」銘青磁片が出土したことによって、南宋代は官窯、元代は仿官窯である可能性があると考えられた。また、元代窯址は哥窯であるとする説もあるが、宋代名窯の一つである哥窯は未だ実態が解明されて居ないため、さらに検討の必要がある。老虎洞窯の創始年代については、多くの説がある。それらの中で、最も古い堆積層から多くの「戊」銘の器物が発見された事を捉え、史実と照合した結果、それは干支紀年を省略した可能性があるとして、「戊」年を紹興24年(1154)に比定し、その前後に創建されたと見る説が杭州市文物考古所・唐俊傑氏により提出されている。実

物資料による推定であるため注目される。廃棄年代は13世紀初めを遡らないと考えられて居る。

老虎洞窯の技術

宋代官窯の中でも、最も長く続いたと思われる修内司官窯は、多くの技術革新をもたらした。先述の南宋代の文献には修内司窯の特徴の一つとして、「澄泥為範、其の精緻を極め、釉色佳徹」と記し、陶範成形を強調しているが、老虎洞窯址発掘調査の結果はその記述とは異なり、轆轤成形が最も多い事が報告されている。その事を実証するように、陶範の出土例は、現在公表されている限り、唯一例に止まる。これをどのように考えるべきか、諸説がある。同一種類の器皿が大きさを含め全く同じ造形である例が多い事、洗などで、轆轤目がなく、薄作りのものがある事、碗、盤などで、つけ高台のものが多い事などを挙げて、現実には陶範成形がかなり行われていたと説明する説がある。いずれにせよ、厳格な仕様が定められ、大量生産が求められた官窯では、陶範成形が行われたと考えるのが常識的であり、今後、新しい資料が発見されることを期待するしかない。何故なら陶範成形は、南宋官窯を特徴づける厚釉薄胎を成立させる技術的基盤と考えられるからである。また南宋官窯の釉色が深い幽玄な趣を呈している事も、胎土に鉄分の多い紫金土を混じたり、多層施釉の技術等によって効果が高められている。この多層施釉の現象の有無は、台北故宮博物院の所蔵する多くの南宋官窯の作品検証の結果、後世の仿製品との鑑別に有効な手段の一つであることが確認出来た。南宋官窯の釉色は、明代の『遵生八箋』にある「粉青色を上とする」との記述が適用される事が多い。しかし、汝窯と同じく失透性では共通するが、天青色と粉青色では、青と緑の割合が異なり、目指すところが違う。また、老虎洞窯と郊壇下窯出土品の比較対照は、一部の器種においては行われているが、十分なものとは言えず、両者を識別する事は、現状では困難である。

南宋官窯研究の動向と課題

修内司官窯に関しては現在、老虎洞窯がそれに同定されつつあるが、伝世の南宋官窯作品と老虎洞窯出土品が完全に一致するとは言えない事、杭州市内の諸処から官窯青磁片が出土する事などを理由に、南宋官窯は複数箇所存在するのではないかとの疑問がまだ一部にある。これに対して、杭州市文物考古研究所(現在の名称)の見解は、それら青磁片の大部分が南宋地層の二次堆積ではない場所からの出土である事、窯体等の生産遺跡が発見されていない事を理由に否定しているが、将来の重大な検討事項の一つだろう。また、郊壇下窯の更なる発掘調査も必要である。老虎洞窯と郊壇下官窯製品の比較対照も一部行われているが、未だ十分ではなく、現状での両者の識別は困難と言わざるを得ない。さらに慈溪市を中心とする南宋越窯(余姚官

窯とも言う)のうち寺龍口窯は発掘調査が行われたが、重要な窯である低嶺頭窯は未発掘で、大きな課題となっている。これら南宋越窯も含め、修内司官窯、郊壇下官窯の全貌解明が為されたとき、初めて南宋官窯研究は一つの画期に達するだろう。

(4) 宋代官窯青磁の開片のフラクタル(不規則碎片形)概念による考察

フラクタルとは、フランスの数学者・ブノフ・マンデルブロが提案した幾何学的形態に関する概念である。この言葉は現在、自己相似性を持つ図形という意味で使われている。自己相似性の例の一つに、枝分かれする樹木が挙げられる。大きな枝分かれの先に、同じような枝分かれが次々に生じていく。この場合は、二次元より大きく、三次元より小さい次元で表される。この概念を青磁釉の表面に現れる開片(一種のひび割れ現象)に適用すると、窯のなかで胎土と釉は密着して居るが、釉の熱膨張率が胎土のそれより大きければ、焼成後の冷却中に釉の面が胎土より大きく収縮しようとして、ひび割れが生じることになる。一つのひび割れは線状に伸び、次々と釉表にひび割れを生じていく。

こうした開片が積極的に評価され、鑑賞の対象となったのは明代以降であるとする説がある。しかし五代の文献『開元天寶遺事』にはすでに酒杯に「乱糸文」があることが指摘され注目されている。さらに明初の曹昭『格古要論』では、汝窯や南宋官窯の開片(蟹爪文)が評価の対象になっている。伝世の汝窯や南宋官窯製品を見ると、無文の例は少なく、殆どの青磁に開片が見られる。しかもそれらの青磁が当時から珍重されていたことを考えると、宋代には既に開片に対する評価は定まっていたと考えられる。開片により器物の個性化や差異化が図られ、開片のない均質な質感より、より複雑で重層的な釉色釉調によって実現された青磁が高く評価されたのである。このことは宋代の精神性尊重の時代風潮を表すものであり、開片はある意味で、時代を象徴する美の結晶であったとも言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

伊藤 郁太郎

「南宋官窯雑感」、『故宮文物』、査読有、No.340、2011、74-84

小林 仁

「我遇見の南宋官窯-細説杭州老虎洞窯出土之陶片」、『典藏』(台北)、査読無、No.219、2010、156-167

小林 仁

「“澄泥為範”説汝窯」、『故宮博物院刊』、査読無、第5期、2010、73-89

〔学会発表〕(計7件)

伊藤 郁太郎

「高麗鉄絵青磁の系譜と特質」、『杭州・高麗青磁国際学会議』、2013/6/28、中国・浙江大学

伊藤 郁太郎

「“宣和奉使高麗図経”における翡色青磁の実像」、『高麗青磁と中世アジア陶磁器シンポジウム』、2012/11/2、韓国国立中央博物館

伊藤 郁太郎

「汝州張公巷窯再論」、『第4回Lee & Won 国際学術講演会』、2012/8/25、韓国国立中央博物館

〔図書〕(計3件)

小林 仁

故宮出版社、「“澄泥為範”説汝窯」、『宋代官窯及官窯制度国際学術研討会論文集』、2010、pp.627(195-216)

伊藤 郁太郎

故宮出版社、「北宋官窯の譜系-汝州張公巷窯の諸問題」、『宋代官窯及官窯制度国際学術研討会論文集』、2010、pp.627(35-50)

出川 哲朗

故宮出版社、「官窯青磁開片中的審美価値」、『宋代官窯及官窯制度国際学術研討会論文集』、2010、pp.627(283-290)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

伊藤 郁太郎 (ITOHI IKUTARO)

公益財団法人大阪市博物館協会

大阪市立東洋陶磁美術館・名誉館長

研究者番号: 40373518

(3) 連携研究者

出川 哲朗 (DEGAWA TETSURO)

公益財団法人大阪市博物館協会

大阪市立東洋陶磁美術館・館長

研究者番号: 50373519

小林 仁 (KOBAYASHI HITOSHI)

公益財団法人大阪市博物館協会

大阪市立東洋陶磁美術館・学芸課・主任学芸員

学芸員

研究者番号: 00373522

鄭 銀珍 (JUNG EUNJIN)

公益財団法人大阪市博物館協会

大阪市立東洋陶磁美術館・学芸課・学芸員

研究者番号: 20531263